中世益田講座　第7回（全9回）

“港湾遺跡に見る東アジア交易”

【問い合わせ先】市文化財課　☎31-0625

中世は、人と物の往来が盛んに行われた時代でした。中国を中心とした東アジアの国々との交易によって、日本には青磁や白磁といった焼物の他に、貨幣・香薬・繊維製品や書籍・書画など多様な品物が輸入されました。一方、日本からは金・銀などの鉱物資源、硫黄（火薬の原料）、刀剣類などが海外に向けて輸出されていました。

こうした海外交易の窓口（拠点）となった港湾遺跡の様子は、福岡県の博多遺跡群や大阪府の堺環濠都市遺跡などの調査によって少しずつ明らかになっています。また、近年の発掘調査では、益田平野を流れる高津川・益田川の河口部にも、かつて国内外の国や地域と活発に交易を行った港湾遺跡が次々と発見されています。

港湾遺跡は、物流の拠点として、湊町全体が計画的に整備され、久城町の沖手遺跡では大規模な集落跡の全体が道路によって整然と区画されていました。十二世紀にこれほどの町づくりが進んでいた例は、全国でも他に例がありません。

中須町の中須西原・東原遺跡では、青森県十三湊遺跡など全国で数例ほどしか確認されていない船着場跡が、広範囲にわたって残っていました。益田に限らず、博多や堺、十三湊などは遠浅の砂浜地形で、大型船は沖合に停泊し、小船を使って物資を船着場へ陸揚げしていたと考えられます。さらに、交易を行っていたことを裏付ける証拠として、船着場から「荷札」が出てきました。当時の輸入品は、壺や甕など大型の容器（コンテナ）に詰められ、荷物の注文者や内容がわかるように木製の荷札がくくりつけられていました。韓国新安沖の海底から引き揚げられた沈没船からも、日本人名や寺院名が記された荷札が多数発見されており、中須湊にもこうした大型船が行き来していたことが想像されます。

河口部の港湾遺跡を拠点として行われていた列島規模、東アジア規模の交易が、山陰の有力武士団として成長した益田氏の経済基盤を支えていました。

中須湊想像図

日本海から望む河口部